

関西圏における表層地質の分布状況 ~ 西大阪平野と東大阪平野地域 ~

Subsurface Geology in Osaka plain using borehole database and its application

北田 奈緒子 [1]; 井上 直人 [1]; 竹村 恵二 [2]; 三田村 宗樹 [3]; 大島 昭彦 [4]

Naoko Kitada[1]; Naoto Inoue[1]; Keiji Takemura[2]; Muneki Mitamura[3]; Akihiko Oshima[4]

[1] 地盤研究財団; [2] 京大・理・地球熱学研究施設; [3] 大阪市大・理・地球; [4] 大阪市大・工・都市系

[1] GRI; [2] Beppu Geo. Res. Labo., Grad. Sci., Kyoto Univ.; [3] Geosci., Osaka City Univ.; [4] Urban Eng., Osaka City Univ.

大阪平野を中心として、近畿地域では鮮新・更新統の大阪層群が広く堆積しており、その上位を段丘堆積物および完新統の地層が覆っている。低平地では地表付近に広く分布する Ma13 層（完新統）および Ma12 層（更新統）と呼ばれる海成粘土層は鍵層となり、建設施工ボーリングデータでも認定することが可能である。関西圏地盤情報の活用協議会（2003～）となり、大阪堆積盆地のみならず近畿圏の平野および盆地地域の表層地盤情報を地質学および地盤工学の両方から相互検討し、堆積環境や変遷に伴う地盤性状がどのような地盤工学的な特徴につながるのか検討を行っている。

これまでには海水準変動による海成粘土の層序がわかりやすい大阪平野の西大阪地域を中心に海進時のメカニズムなどについて検討を行っていたが、今回は東大阪平野地域も合わせて検討を行った。西大阪平野部の各海成粘土層は、ほぼ水平に堆積し、上町断層付近で消滅する。これに対して東大阪平野地域では、各粘土層は南東に傾動し、水平に堆積しているようには見られない。この傾動は下位の地層ほど大きいことから、継続的に南東方向が沈降している可能性を示し、生駒断層の活動と推測される。また、旧大和川系が北に向かって流れ出していた際の扇状地も見られ、南から東大阪平野の中央部付近までは扇状地性の砂礫層が見られる。現在の淀川水系では、河床が幅広く、河谷浸食も大きく見られ、この河川堤防により、旧大和川系の河川は、北への流れを妨げられ、西大阪に向かって進路を変更する際に停滞し、氾濫を繰り返していたと考えられる。本発表では、このような東大阪平野の堆積構造を中心に、ボーリングデータベースを用いて検討を行った結果を報告する。